

第三章 神の永遠のご計画について

第三節（一）「神の栄光を現すための選び」

はじめに

前回まで、第三章第一節と第二節を学んできました。第一節では、神が永遠の昔から、ご自身の最も知恵に富み、最も聖なるご計画によって、起こるすべてのことを自由に、また不変に定められたことを学びました。第二節では、そのご計画が、人間の将来の行動を予見した結果ではなく、神ご自身の自由なご意志に基づくことを確認しました。もちろん、このことは人間の責任や信仰の応答を否定するものではありません。神は御言葉と聖霊によって私たちを召されます。そして私たちは、実際に信じ、悔い改め、キリストに従います。しかし、そのすべての始まりは神の恵みにあります。

今日は第三節に入ります。この節は、ウェストミンスター信仰告白の中でも最も慎重に、そして最も深い畏れをもって読まなければならない箇所の一つです。なぜなら、この節では「神の選び」と「神の栄光」という、聖書の中心的な主題が結び付けられているからです。しかし、この箇所は歴史の中でしばしば誤解されてきました。「予定論は、人を選別する冷たい教理ではないか」「神は初めから人を救う者と滅びる者に分けておられるということなのか」—こうした問いが繰り返し投げかけられてきました。そのため、この第三節を読むときには、一つの原則を忘れてはなりません。**私たちは、信仰告白を信仰告白だけで読むのではなく、聖書全体の証言の中で読む**ということです。第一章で学んだように、教会の最高の権威は信仰告白ではありません。聖書です。信仰告白は、その聖書を忠実に要約しようとした教会の告白です。ですから、第三節もまた、創世記から黙示録に至る神の救いの歴史の中で理解する必要があります。

一 第三節が語ろうとしていること

お配りしたレジュメには、予定論について非常に大切な指摘があります。「予定論の目的は、ひたすら『神の栄光』を目指している」。ここが第三節の中心です。予定論は、私たちの知的好奇心を満たすために与えられた教えではありません。また、「誰が選ばれ、誰が選ばれないのか」を推測するための教えでもありません。第三節がまず私たちに示すのは、予定論を神の栄光という目的から読むべきだということです。しかし、「神の栄光」と聞くと、私たちは少し誤解しやすいかもしれません。「神はご自分が誉められることだけを求めておられるのだろうか」、あるいは、「神はご自身の栄光のために人間を利用されるのだろうか」、そう考えて

しまう人もいるかもしれません。しかし、聖書が語る「神の栄光」は、そのような自己顕示ではありません。聖書において神の栄光とは、**神が神としての真実を現されること**です。神の義が現れること。神の愛が現れること。神の憐れみが現れること。神の真実が歴史の中で明らかになること。それが「神の栄光」です。ですから、予定論が神の栄光を目的とするとは、神の恵みと義が最も完全なかたちで現されることを意味しています。

二 旧約聖書は「神の栄光」をどのように語るのでしょうか

ここで、少し旧約聖書を振り返ってみましょう。「神の栄光」という言葉は、新約聖書になって突然現れるテーマではありません。出エジプト記では、イスラエルがエジプトから救い出される出来事そのものが、神の栄光を現す出来事として語られています。神はモーセに、「わたしはファラオの心をかたくなにする。そして、わたしはファラオとその全軍勢によって栄光を現す」（出エジプト記 14 章）と告げられます。ここで神の栄光とは、権力を誇示することではありません。奴隷とされていた民を解放し、契約の民として新しい歩みへ導く救いの御業が、神の栄光です。また、預言者イザヤは繰り返し、「わたしの栄光をほかの者に与えない」（イザヤ 42・8）と語ります。これは、神が人間を押さえつけようとしているものではありません。偶像では救いは実現せず、生ける神だけが世界を新しくされるという宣言です。したがって、旧約聖書における神の栄光とは、**契約に忠実な神が、ご自身の約束を実現されること**なのです。

三 神の栄光はイエス・キリストにおいて現されました

旧約聖書は、神の栄光を「契約に忠実な神が、ご自身の救いの御業を実現されること」として語っていました。では、新約聖書はその栄光をどこに見いだしているのでしょうか。その答えは明確です。イエス・キリストです。ヨハネによる福音書は、その冒頭でこのように語ります。「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた」（ヨハネ 1・14）。ここでヨハネは、「わたしたちはその栄光を見た」と証言します。しかし、それはシナイ山の雷鳴や炎ではありません。権力を誇示する王の姿でもありません。一人の人となって来られたイエス・キリストのうちに、神の栄光を見たということです。これは旧約聖書の神理解を否定するものではありません。むしろ完成するものです。幕屋を満たした栄光も、神殿を満たした栄光も、すべてキリストにおいて完成します。ですから、新約聖書において「神の栄光」とは、単なる神の威厳ではありません。**神がイエス・キリストを通して、その恵みと真理を世界に現されたこと**なのです。

四 十字架こそ神の栄光です

ここで私たちは、ヨハネ福音書の最も驚くべき特徴に気づきます。ヨハネは、イエスが十字架へ向かわれることを「栄光を受ける時」と呼びます。普通に考えれば、十字架は敗北です。弟子たちは逃げ去り、イエスは犯罪人として処刑されます。当時のローマ帝国では、十字架刑は最も屈辱的な刑罰でした。ところがヨハネは、その十字架を神の栄光として語ります。なぜでしょうか。それは、そこに神の愛が最も完全に現されたからです。神は力によって世界を支配されるのではありません。御子を与えるほどに世界を愛されました。神の義は、罪を見逃すことによってではなく、御子の十字架において実現しました。神の憐れみも、十字架において最も深く示されました。ですから、神の栄光とは、神の力だけではありません。**神の愛、神の義、神の真実が十字架において一つとなって現されたこと**なのです。この点を忘れて予定論だけを取り出すなら、神は冷たい運命を支配する存在になってしまいます。しかし、聖書はそのようには語りません。神の永遠のご計画は、十字架のキリストにおいて私たちに示されたのです。

五 エフェソ書一章は何を語っているのでしょうか

予定論を語る代表的な箇所として、エフェソ書一章がよく引用されます。しかし、この章を注意深く読むと、パウロが最も多く語っている言葉があります。それは、「**キリストにおいて**」という言葉です。「キリストにおいて選ばれた」「キリストによって贖われた」「キリストにあって相続人とされた」「キリストにあって聖霊の証印を受けた」。パウロの関心は、「予定」という概念そのものではありません。**キリストにおいて実現した神の救い**です。しかも、この長い頌栄は三度にわたって、「神の栄光をたたえるためです」という言葉で区切られています（エフェソ 1 章 6・12・14 節）。ここでも目的は同じです。予定論そのものではありません。神の栄光です。しかも、その栄光は、恵みによる救いとして現されています。ここにウェストミンスター信仰告白第三章第三節の背景があります。予定とは、神が恵みを惜しみなく与えられるための永遠のご計画なのです。

六 予定は「運命」ではありません

レジュメにも書いた通り「**予定とは運命ではなく、神のみことです**」。この区別は、とても重要です。運命という言葉から、多くの人は「人間の努力や祈りには意味がなく、すべてが機械的に決まっている」という印象を受けます。しかし、ウェストミンスター信仰告白が語る神は、そのようなお方ではありません。神は人格を持つお方です。愛し、語り、契約を結び、赦し、忍耐し、導かれるお方です。その神が立てられた永遠のご計画もまた、人格的な愛と知恵に満ちたご計画です。だからこそ、私たちは祈ります。だからこそ、伝道します。だからこそ、悔い改めます。神は、それらのすべてを、ご自身のご計画の中で用いてくださるからです。ここでも、第三章第一節で学んだ「第二原因」の教えが思い起こされます。神

は目的だけでなく、その目的に至る手段をも定めておられます。祈りも、宣教も、奉仕も、信仰も、神が用いてくださる恵みの手段なのです。

結び

ここまで私たちは、ウェストミンスター信仰告白第三章第三節を通して、「神の永遠のご計画」と「神の栄光」の関係について学んできました。予定論という言葉だけを聞くと、多くの人は難解な教理や、神学者たちの論争を思い浮かべるかもしれませんが、しかし、聖書が私たちに示しているのは、そのような抽象的な議論ではありません。聖書は一貫して、**神が歴史の中でご自身の救いの御業を完成していかれること**を語っています。神はアブラハムを召されました。イスラエルをエジプトから導き出されました。ダビデと契約を結ばれました。預言者たちを遣わされました。そして時が満ちて、御子イエス・キリストを世に遣わされました。これらは互いに無関係な出来事ではありません。創世記から黙示録までを貫く、一つの壮大な神のご計画です。その中心に立っておられるのが、イエス・キリストです。ですから、予定論を理解しようとするとき、私たちはまずキリストを見なければなりません。キリストから離れて予定論だけを論じれば、それは冷たい運命論になってしまいます。しかし、十字架と復活の主イエス・キリストを通して予定論を読むなら、それは神の愛と憐れみを語る福音となります。神は、ご自身の栄光を現されます。しかし、その栄光とは、人間を圧倒する力の誇示ではありません。御子を与えるほどに世界を愛された神の愛が現されることです。罪人を義とし、敵であった者を子とし、滅びに向かう者をいのちへと導かれる、その救いの御業こそ、神の栄光なのです。だから私たちは、予定論を学んだあと、自分が選ばれているかどうかを詮索する者になるのではなく、むしろ、「このような私をもキリストにあって招き、今日まで導いてくださった神に栄光がありますように」と礼拝する者へと導かれます。パウロも、ローマ書9章から11章まで、神の選びと憐れみについて深く論じたあと、最後に議論を終えるのではなく、礼拝へと導かれます。

「ああ、神の富と知恵と知識とのなんと深いことか。……すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が神に永遠にありますように、アーメン。」
(ローマ 11・33、36)

これこそ、ウェストミンスター信仰告白第三章が私たちを導こうとしている到達点ではないでしょうか。予定論の終着点は、人間の知識ではありません。神への礼拝です。神への賛美です。そして、自分の救いを自分の功績ではなく、神の恵みとして感謝することです。私たちがこの教理を学ぶことによって、神への信頼が深められ、キリストへの感謝が豊かになり、「ただ神にのみ栄光あれ (Soli Deo Gloria)」という宗教改革者たちの告白を、私たち自身

の信仰告白として新たにすることができるなら、この第三章を学ぶ目的は十分に果たされたと言えるでしょう。

歴史神学コラム

カルヴァンは予定論を何のために語ったのか

予定論について語るとき、多くの人はカルヴァンを思い浮かべます。しかし、カルヴァン自身の『キリスト教綱要』を読むと、彼の目的は「誰が救われ、誰が滅びるのか」を詮索することではありませんでした。カルヴァンが最も恐れたのは、人間が自分の行いや信仰の強さを救いの根拠にしてしまうことでした。だからこそ彼は、救いは最初から最後まで神の恵みによることを強調したのです。同時にカルヴァンは、「キリストの外に予定を求めてはならない」と繰り返し述べています。私たちは神の隠されたご計画をのぞき込むことはできません。しかし、神はご自身の御心をイエス・キリストにおいて明らかにしてくださいました。したがって、予定論は「隠された神」を追い求める教理ではなく、「啓示されたキリスト」を見つめる教理です。この視点は、現代改革派神学においても大切に受け継がれています。そして、それはウェストミンスター信仰告白を読む際にも、私たちが決して見失ってはならない視点と言えるでしょう。

第三節では、神の永遠のご計画が神の栄光を現すものであることを見てきました。続く第四節では、そのご計画が、キリストにあって人を救いへと選ぶという具体的な形で語られます。したがって、ここで扱う「選び」は、第三節で見た「神の栄光」と切り離された別の主題ではありません。神の恵みがキリストにおいて現され、教会を謙遜と宣教へ導くという同じ流れの中で理解されるべきものです。

第四節（一）「神はその民をキリストにあって選ばれる」

では第四節に入ります。ここでは、神の永遠のご計画が、人間の救いにどのように具体的に及ぶのかが語られます。この節が扱うのは「選び」の教理です。しかし「選び」という言葉は、しばしば誤解されてきました。「神は最初から一部の人だけを愛しておられるのではないか」「それなら福音を宣べ伝える意味はあるのか」「教会だけが特別で、世界は見捨てられているということなのか」。こうした疑問は、選びを聖書全体の文脈から切り離して考えるときに生じます。そこで今日も、第一章で確認した原則に立ち返ります。信仰告白は、聖書全体の証言の中で理解されなければならない。この原則を忘れずに、第四節を読んでいきましょう。

一 聖書における「選び」は何のためでしょうか

ここで一つ、用語の関係を確認しておくことも大切です。「予定」は、神の永遠のご計画全体を指す広い言葉として用いられます。その中で「選び」は、神がキリストにあって人を救いへと召される恵みの働きを指します。したがって、第四節で扱う「選び」は、第三章全体の予定論から切り離された別個の教えではなく、神の永遠のご計画が救いにおいて具体的に現れる一つの中心的な面なのです。

私たちは、「選ばれる」と聞くと、まず特権を思い浮かべます。学校なら代表に選ばれる。会社なら昇進する。賞を受ける。そのようなイメージです。しかし、聖書は少し違います。聖書において「選び」は、**使命のための選び**です。最初に選ばれた人物はアブラハムでした。創世記12章で、神はアブラムを召されます。しかし、その召命はアブラム一人の幸福のためではありませんでした。神はこう約束されます。「地上の氏族はすべて、あなたによって祝福に入る」。ここで既に、選びの目的が示されています。神は一人を選び、その一人を通して、すべての民を祝福しようとされるのです。ここに、旧約聖書全体を貫く神の宣教の始まりがあります。

二 イスラエルは何のために選ばれたのでしょうか

このことは、イスラエルにも当てはまります。出エジプト記19章で、神はシナイ山においてイスラエルにこう語られます。「あなたたちは、祭司の王国、聖なる国民となる。」ここで重要なのは、「祭司」という言葉です。祭司とは、自分のために存在する人ではありません。神と人との間に立ち、とりなしをする者です。つまり、イスラエルが選ばれたのは、自分たちだけが祝福されるためではありません。神を世界に証しする民となるためでした。旧約聖書を読み進めると、イスラエルはしばしばこの使命を忘れます。自分たちの選びを特権と考え、異邦人を見下し、契約を自分たちだけのものと考えようようになります。そのとき神は、預言者たちを遣わされます。イザヤも、エレミヤも、アモスも、イスラエルに向かって、「あなたがたは選ばれた民だからこそ、正義を行い、弱い者を守らなければならない」と語りました。つまり、**選びは責任を伴う恵み**なのです。

三 イエスは何のために12人を選ばれたのでしょうか

新約聖書でも、この流れは変わりません。イエスは数多くの弟子たちの中から、12人を選びました。なぜ12人だったのでしょうか。それは、イスラエル12部族を象徴しているからです。イエスは、新しい神の民を形成しようとしておられました。しかし、その12人は決して完全な人々ではありません。漁師がいました。徴税人がいました。疑い深いトマスがいました。そして、ユダもいました。イエスが選ばれたのは、「最も優秀だった人々」で

はありません。恵みによって召された人々です。そしてイエスは、彼らを世界へ遣わされました。

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。そして任命した。それは、あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るためである。」（ヨハネ 15・16）

この御言葉は、第四節を理解する鍵になります。イエスは、「**選んだ**」だけでは終わりません。「**遣わした**」のです。選びは使命を伴います。召命を伴います。ここに、旧約から新約まで一貫して流れている、神が恵みによって民を召し、その民を通して救いを証しさせるという救済の道筋があります。

四 「選ばれた民」とは何を意味するのでしょうか

新約聖書で「選び」という言葉が最も美しく語られている箇所の一つが、ペトロの手紙一第一章、そして第二章です。ペトロは教会に向かって、このように語ります。

「しかし、あなたがたは、選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のものとなった民です。それは、あなたがたを暗闇の中から驚くべき光の中へ招き入れてくださった方の力ある御業を、あなたがたが広く伝えるためなのです。」（I ペトロ 2・9）

ここで注目したいのは、「それは」という言葉です。教会は「選ばれた民」です。しかし、その文章はそこで終わっていません。「それは.....広く伝えるためなのです」。つまり、教会は自分たちだけが救われたことを喜ぶために存在しているわけではありません。神の救いの御業を世界へ証しするために選ばれているのです。これは、アブラハムへの召命とも、シナイ契約とも、十二使徒の召命とも一致しています。神はいつも、一人を選び、その一人を通して多くの人を祝福されます。これが神の救済の方法です。

五 「選び」は排他性ではなく、奉仕への召命です

ここで、私たちは教会の歴史を振り返る必要があります。残念ながら、教会は時として「選び」を特権として理解してきました。「私たちだけが神に選ばれた民である」「外にいる人々とは本質的に違う」。そのような考え方が生まれると、教会は閉ざされた共同体になってしまいます。しかし、それは聖書の語る「選び」の理解とは異なります。旧約聖書でイスラエルが選ばれたのは、諸国の民に神を証しするためでした。新約聖書で教会が選ばれたのも、世界へ福音を告げ知らせるためです。ですから、選びは壁を築く教理ではありません。**橋を架ける教理**です。神は教会を、ご自身の恵みを証しする器として召されました。だから教会は、自らの優越性を誇ることはできません。もし誇るものがあるとすれば、それは神の

恵みだけです。パウロはコリントの信徒への手紙で、「あなたの持っているもので、いただかなかったものがあるでしょうか」と問いかけています（I コリント 4・7）。救いも、信仰も、召命も、すべて神から受けた恵みです。そのことを知る者は、他者を見下すことができます。むしろ、自分もまた恵みによって生かされている一人の罪人であることを知るからです。

六 改革派教会はこの教理をどのように受け継いできたのでしょうか

ここで、改革派教会の歴史を少し振り返ってみましょう。宗教改革者カルヴァンは、教会を「神の選びの共同体」と理解しました。しかし、それは決して閉鎖的な共同体ではありませんでした。カルヴァンがジュネーヴで行った説教や牧会を見ると、彼は教会を御言葉によって絶えず新しくされる共同体として理解していました。また、ジュネーヴからは多くの牧師や宣教師がヨーロッパ各地へ遣わされました。つまり、選びの教理は宣教を妨げるものではありませんでした。むしろ、**神は必ず御言葉を通してご自身の民を集めてくださる**、という確信があったからこそ、大胆に福音を宣べ伝えることができたのです。ここは、私たち改革派教会が改めて学ぶべき点ではないでしょうか。予定論は、人を受け身にする教理ではありません。神が働かれるという確信があるからこそ、私たちは希望をもって御言葉を語り続けることができます。

七 選びは宣教へと向かいます

ここまで私たちは、「選び」が聖書全体を貫く神の救いの方法であることを見てきました。しかし、ここでもう一つ確認したいことがあります。それは、**神は選ぶだけではなく、遣わされる**ということです。創世記 12 章でアブラハムが召されたときも、出エジプト記十九章でイスラエルが契約の民となったときも、イエスが 12 人を召されたときも、そこには必ず「遣わす」という目的がありました。神の選びは、決して終着点ではありません。新しい使命の始まりです。これは、イエスの最後の命令にも表れています。復活された主は弟子たちに、「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしてください」（マタイ 28・19）と命じられました。この命令は、「選ばれた者だけを集めなさい」という命令ではありません。「すべての民」へ向かう命令です。つまり、神の選びは教会を内側へ閉じ込めるものではなく、世界へ押し出していく力なのです。

八 ローマ書 9 章から 11 章は何を語っているのでしょうか

予定論を論じるとき、多くの人はローマ書 9 章だけを読みます。しかし、パウロ自身は 9 章から 11 章までを一つの議論として書いています。その中心にある問いは、「**神はイスラエルを見捨てられたのか**」という問題でした。イスラエルの多くがキリストを受け入れなかつ

たため、初代教会には大きな動揺がありました。しかしパウロは、「神の賜物と招きとは取り消されません」（ローマ 11・29）と語ります。さらに彼は、異邦人の教会に向かって高慢にならないよう厳しく戒めています。野生のオリーブである異邦人は、恵みによって良いオリーブの木に接ぎ木されたのです。ですから、異邦人がイスラエルを見下す理由はどこにもありません。ここでも「選び」は誇りではなく、**感謝**へと導きます。そして最後にパウロは、「神はすべての人を不従順の状態に閉じ込められましたが、それは、すべての人を憐れむためだったのです」（ローマ 11・32）と語ります。この一節は、第三章第四節を読むときにも忘れてはならない御言葉です。神の選びは、神の憐れみを否定するものではありません。むしろ、その憐れみの深さを証ししています。

九 選びは教会を謙遜にします

教会の歴史を見ると、「選ばれた民」という言葉が誤って用いられたこともありました。ある時代には、自分たちだけが真の教会であるという思いが強くなり、他の教会や他者を見下すような態度が生まれました。また、歴史の中には、「神に選ばれた民」という考えが、民族的・政治的優越感と結びついてしまった例もあります。しかし、それは聖書の語る選びとは異なります。聖書が教える選びは、人を高ぶらせるためではありません。むしろ、人を低くします。なぜなら、「あなたが救われたのは、あなたが優れていたからではない」ということを知るからです。パウロはコリントの教会に向かって、「あなたがたの中で、肉による知者が多かったわけではなく、権力者が多かったわけでもなく、家柄の良い者が多かったわけでもありません」（I コリント 1・26）と言います。神は、世の基準とは異なる仕方で働かれます。それは、人間が自分を誇ることがないようにするためです。ですから、改革派教会が予定論を大切にすれば、それは「私たちだけが正しい」という態度ではなく、「**私たちもまた、ただ恵みによって生かされている罪人である**」という謙遜へと導かなければなりません。ここに、ウェストミンスター信仰告白第四節の牧会的な意義があります。

歴史神学コラム

「選び」と宣教は対立するのでしょうか

近代になると、「予定論は宣教の妨げになる」という批判がしばしば語られるようになりました。しかし、歴史を丁寧に見ると、必ずしもそうではありません。宗教改革以後の改革派教会からも、多くの宣教師が世界へ遣わされました。彼らを支えていたのは、「神は御言葉を通してご自身の民を召し集められる」という確信でした。現代の宣教学者デイヴィッド・ボッシュも、教会は「選ばれた共同体」と同時に、「遣わされた共同体（sent community）」であることを強調しています。この視点は、ウェストミンスター信仰告白そ

のものに反するものではありません。むしろ、アブラハムから始まり、イスラエルを経て、キリストと教会へ至る聖書全体の流れを見れば、「選びは宣教のためである」という理解は、聖書が一貫して証言していることだと言えるでしょう。

十 選びは信仰者にどのような慰めを与えるのでしょうか

ここまで私たちは、聖書全体を通して「選び」という主題を見てきました。創世記ではアブラハムが召されました。出エジプト記ではイスラエルが契約の民として選ばれました。預言者たちは、その選びが世界への証しのためであることを繰り返し語りました。そして新約聖書では、イエス・キリストが弟子たちを選び、教会を世界へ遣わされました。このように見えてくると、神の選びとは、決して人間を分類するための教えではありません。神がご自身の救いの御業を歴史の中で実現していかれる方法なのです。では、この教理は私たち一人ひとりに何を与えるのでしょうか。それは**慰め**です。私たちは信仰生活の中で、自分の弱さを何度も思い知らされます。信仰が揺らぐことがあります。祈れない日もあります。御言葉に従えない自分に失望することもあります。もし救いが、私たちの信仰の強さや熱心さにかかっているなら、誰一人として安心することはできません。しかし、聖書は私たちに、神が救いの始まりであり、終わりでもあることを教えています。神が召し、神が支え、神が最後まで導いてくださいます。だから私たちは、自分自身ではなく、神の真実に希望を置くことができるのです。

十一 神の恵みは私たちの想像よりも大きい

しかし、ここでもう一つ忘れてはならないことがあります。選びの教理を学ぶとき、私たちはしばしば、「では、救われない人はどうなるのか」という問いに心を奪われます。もちろん、その問いは決して軽いものではありません。教会は古くからこの問題について真剣に考えてきました。しかし、ウェストミンスター信仰告白も、そして何より聖書も、私たちに神の隠された御心を推測するようには求めていません。むしろ私たちに示されているのは、神は憐れみに富むお方であり、悔い改めて生きることを願われるお方であるという事実です。エゼキエル書で神は、「わたしは悪人が死ぬのを喜ばない。むしろ悪人がその道を離れて生きることを喜ぶ」と語られます（エゼキエル 18・23、33・11）。また、新約聖書でも、「神は、すべての人々が救われて真理を知るようになることを望んでおられます」（I テモテ 2・4）と記されています。これらの聖句を読むとき、私たちは神の憐れみを、人間の論理で狭く限定してはならないことを教えられます。予定論を学ぶ目的は、神の憐れみの限界を探ることではありません。神の恵みの深さを知ることなのです。

十二 礼拝へと導く教理

そのため、ローマ書 9 章から 11 章の議論も、最終的には説明のためだけでなく、礼拝のために語られていることが分かります。神の選びと憐れみをたどるとき、パウロは最後に、理解し尽くした者としてではなく、神の深い知恵の前にひれ伏す者として立っています。

「ああ、神の富と知恵と知識とのなんと深いことか。だれが、神の心を知ることができたでしょう。すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が神に永遠にありますように。アーメン。」（ローマ 11・33、36）

ここには、大きな意味があります。パウロは予定論を論じたあと、「私はすべて理解した」とは言いません。むしろ、「神の知恵はなんと深いことか」と礼拝します。これが教会の姿勢です。私たちは、神の啓示には喜んで従います。しかし、神が明らかにしておられないことについては、謙遜に沈黙することも学ばなければなりません。信仰とは、すべてを理解した者の確信ではありません。**信頼する者の確信**です。その意味で、予定論は人間の知識を誇らせる教理ではなく、神への礼拝へと導く教理なのです。

聖書神学コラム

「選び」はどこへ向かっているのでしょうか

聖書の最後である黙示録を見ると、神の選びの目的が完成します。ヨハネは、「あらゆる国民、部族、民族、言葉の違う民」の大群衆が、小羊の御前で神を礼拝している幻を見ます（黙示録 7 章）。ここには、アブラハムへの約束の完成があります。「あなたによって、地上のすべての氏族は祝福に入る。」神の選びは、一人から始まり、一つの民族を経て、キリストにおいて世界へと広がり、ついにはあらゆる民族が神を礼拝する新しい創造へと至ります。ですから、「選び」は閉じられた教理ではありません。それは、創世記から黙示録までを貫く救済史そのものなのです。

まとめ

第三章第四節を学びながら、私たちは「選び」の教理について多くのことを確認しました。

- 選びは、神の自由な恵みによります。
- 選びは、特権ではなく使命です。
- 選びは、教会を世界へ遣わす召命です。
- 選びは、人間の誇りではなく、謙遜と感謝を生み出します。
- 選びは、信仰者に深い慰めを与えます。

- そして、そのすべては、神の栄光へと私たちを導きます。

ここまで第三章を読み進めてくると、一つのことがはっきり見えてきます。ウェストミンスター信仰告白が語ろうとしているのは、「誰が救われ、誰が救われないのか」という推測ではありません。神は、ご自身の恵みによって、キリストにある救いを確かに完成してください。そのことへの揺るぎない信頼です。

次回は**第三章第五節**に入ります。ここから信仰告白は、「選び」がどのように歴史の中で実現していくのかを、さらに具体的に語り始めます。第五節以降では、神の永遠のご計画が「召命」「義認」「聖化」「栄化」という救いの歩みの中でどのように実を結ぶのかが、いよいよ展開されます。